生徒のみなさんの質問から主なものを抜粋

阪神・淡路大震災で地震の見方はどう変わりましたか

　近畿でも大きな地震があることをはっきり認識した。歴史的にみれば、近畿で地震があるのは当然のことだった。後悔し反省した。

阪神・淡路大震災で一番苦労した取材は何ですか。

　わたしは神戸市政担当だった。防災のため復興まちづくりを進めるようとする行政と、個々に課題や悩みを抱える住民のはざまで真の住民合意とは何か、どのタイミングでどう記事にしたらいいか悩みに悩んだ。

一番印象に残った取材を教えてください。

　東加古川の仮設住宅で、神戸に帰りたいと思いながら病で亡くなった女性の取材。その女性は雪の積もった夜明けに逝った。「神戸に行きたい」と訴えた言葉が最後になった。

震災が起きて一番悲しかったこと、苦しかったことは何ですか？

　たくさんありすぎて分からないが、まだ下敷きになっている人がいるのに火事が起きている現場、家族の救出を待つ人たちのようす。わたしは家族が犠牲になったわけではない。この状況を伝えないといけなかった。

当日の朝、神戸新聞社の中はどのような様子でしたか？

　神戸新聞本社は後に全壊判定された。天井は落ち込み、柱には大きなひびが入り、窓ガラスはすべて割れた。

　わたしは宿直勤務だった。発生時、ロッカーや机が飛んでくるように滑ってきたのと、窓ガラスが割れ続けている音、とても寒かったのを覚えている。写真は当日の編集局内。

　あと、神戸新聞社の新聞を作るコンピューターが壊れ、災害協定を結んでいた京都新聞社に印刷してもらった。山根編集局長が京都新聞社との電話で、泣きながら新聞の印刷を頼んでいた記憶は鮮明だ。

被災されたとき、何が起きたと思われましたか？

まぎれもなく、巨大地震。

震災の時、どのような気持ちで新聞記事を書いていましたか？
記事を書くことで、命が助かった住民の望むかたちで、復旧・復興が進むように、国などから多くの「助け」が来るように、祈りにも似た気持ちだった。

阪神・淡路大震災では、どのような取材に出ていったのですか。
はじめは避難者や被災者の取材、京大防災研究所で地震のメカニズムの取材、神戸市担当としては市がどう復興まちづくりを進めているか、住民との話し合いがどう進んでいるかーなど。

震災のとき、新聞を作る中で気をつけたことは何ですか？
いつも以上に正確な記事。非常時なので、誤字やちょっとしたミスがたいへんなことになる。神戸市政担当で、市を主語にした記事を書くので、特に大きな記事を書くときは、住民の立場を考えながら記事にすることを心掛けた。

災害報道を行う際、気をつけていることは何ですか？
読者に役立つ情報、安全安心情報を提供すること。読者に役立つコーナーをすぐ立ち上げること。読者の意見を聞いて、よりいっそう分かりやすい紙面を作ること。読者を励ます記事を書くこと。

震災で一番驚いた光景はどんな光景ですか。

神戸市東灘区で阪神高速が635㍍にわたって横倒しになった、この光景が一番驚いた。かなり早く、この現場に行ったが、体が震えた。

避難所や仮設住宅で、家族を亡くされた方々への取材はどういうところに気をつけましたか。
この状況を伝えないといけない、と思うから、遺族の方が口を開くまで待つ。「丁寧な」「気をつかった」取材を心掛ける。遺族の方が一番つらいけれど、こ

んなつらい取材は嫌だと思うときはある。勇気を振り絞らないといけないときもある。泣きながら記事を書くときもある。

災害報道で一番大変なことは何ですか？
　自分の命も守る、一番考えないといけないのは、被災者の立場に立った報道

取材を拒否されたときや、嫌がられても取材を続ける思いはどうしてですか？
　「こうしたことが二度と起きないように」という思いがある。社会背景など伝えないといけないことがあるから。

震災を経験していない私たちができることは何でしょうか？
　いろんな災害から教訓を学び、災害知識を身に付けることで自分や家族、友達の命を守ること。災害知識を身に付けていても、けがすることもあるけど、災害知識がないと命を落とす危険性が高まる。

どうしてそこまで新聞を届けようと思えるのですか。
　災害時、新聞は「ライフライン」の役目を果たす、みんなに安全安心情報を届ける大切な役割があるが、毎日新聞を届けるのは新聞社の人間にとって、拠って立つもの、生きてゆく大前提となるものだから
　神戸新聞社では米騒動のとき、神戸空襲のとき、阪神・淡路大震災のときに新聞発行ができなくなりそうになったが、発行した。休刊日を除いて発行を続けている。